

富山文学の会との出会い

高熊 哲也

金子幸代先生から、富山ゆかりの近代文学について、フランクに研究成果をもちよつてみたかどうかとお誘いがあつたのは2009年だった。早いものです。10年の歳月が流れたが、その間隔月に1回程度の例会を重ねて、個々の会員の皆さんにとつても、会全体としても相応の研究成果を積み上げてきたと言つていいと思う。よい勉強の機会を与えていただいたという思いで、例会にはほぼ欠かさず出席した。今となつてみれば、会員のみなさん方の多様な研究主題に接し、議論を交わしたことは得がたい経験になつたと振り返っている。

私自身は、それまで富山を出自に持つ文筆家にあまり興味を持ったことがなく、翁久允や堀田善衛といった固有名詞は知つていても、彼らの営為についてほとんど知識もなく、さらに作品の舞台を富山に設定した作品群も視野に入れて「ふるさと文学」という括りで捉えるといつたことは、自分の問題意識の範疇には全く入っていな

かつた。自分のそれまでの研究テーマは、梶井基次郎などを題材に、対象を捉える表現主体のあり方、表現主体がテキストを織り出すプロセスを考察することであつた。人がどのように環境と交渉を重ねながら人となるかという、誰しもがくぐる主体の獲得という問題への関心から文学的営為にアプローチしていたということになろうか。そういった自分の主題と本会を結ぶものとして、蜷楼をモチーフとした乱歩の「押絵と旅する男」を自分が担当した例会で取り上げた。ミステリー仕立ての怪異譚は、エンターテインメントとして現代でも色褪せず、様々なオマージュを生んでもいる。富山が作品の舞台に選ばれることをどうとらえるかという視点からの分析を試みたが、それが今自分の取り組む主題につながる契機になつたのだなと改めて感じている。

幸田文の「崩れ」を、造山運動でできた山岳を削りながら国土を形成してきた、日本の風土の原風景を描いた作品として読むとき、富山をその一典型と捉えることができる。今なお砂防工事が続く鳶崩れは、常願寺川下流域の人々に自然への畏れを刷り込み、今なお様々な形で語り継がれ、近代文学にも影響している。例を挙げれば、

鏡花の「黒百合」がその代表格であるが、自分の住まいの近くを流れるいち川沿いに目をやると、源氏鶏太の旧居跡を本会の近藤さんに案内してもらったこともある。さらには宮本輝の「蜚川」の舞台になっていることは有名だが、いずれも今述べた富山の風土の影響下にその文学的営為を考えることもできると思う。

そのような視点から作品に描かれた「描かれた富山」を見ると、実はそれは近代化の断面を示す相に他ならない。驚崩れは自然への畏れを植えつけたが、同時に自然に抗い人々の暮らしを守るための人の営みを生む。治水事業にエネルギーを注ぐことは、人間の力が豊かさを生み出すという近代の理念を具現化することである。一方でそれは、「黒百合」に描かれる立山の幻想への郷愁や、主人公お雪の悲恋といった前近代的な情緒への憧憬も併せて進行する。先に述べた「押絵と旅する男」において、近代の産物レンズが、蜃気楼と重ねられることで不思議を生み出す構造とパラレルだとも言えよう。

時代が進行して、近代産業化が富山という地方の市民社会に目に見える形で浸透し始めた姿を、最も顕著に示しているのが吉村昭の「高熱隧道」や木本正次の「黒部

の太陽」であろう。ダム建設を人間の暗い情念の実現として描くか、戦後民主国家への明るい展望として描くかは別にして、ダム建設は近代化の光と影を象徴しているのである。

「描かれた富山」を近代化の断面として捉え、その跡付けと構造の分析を進めるのが、今の自分の関心事だが、そこから敷衍して「富山を出自とする言語表現者」たちが近代という時代の層にどのように位置づけられるのかという主題も見えてきそうな気がしている。

私にとつては、このような形で自分なりの研究テーマとの出会いを与えてくれた本会は大切な存在であり、とりわけ誘って下さった金子先生には心から感謝している次第である。